

さつみ・古屋垣外遺跡

中央道埋蔵文化財発掘調査報告書

1970.3

日本道路公団 名古屋支社

I 環 境

1. さつみ遺跡

さつみは飯田市上飯田羽場 8 区902~908番地を中心とした地帯である。円沼沢井が幅20m、深さ5mの谷をして東流している右岸の台地上に立地しており、海拔540mである。

ここは旧円沼沢井の作った微かな扇状地上に立地している。したがって古い時代にはしばしば旧円沼沢井の氾濫した所であると考えられる。今日1~2°の東西した緩傾斜地となっている。

円沼沢井は平安時代末期の開

さくと推定されるが(1) この井の設けられる前にも小さい河があつたのを利用したものである。飯田松川の作った古い段丘面(それは平野な正永寺原で、その先端に元山白山社がある)と風越山中の一峰正永寺山の麓に発達した新らしい扇状地の間を流れ下った小さな川があった。その流域へ人工の円沼沢井が落したのである。それでもとの小川を筆者は内円沼沢井と名づけた次第である。

本遺跡の西北300mの湯渡遺

跡は、古くよりよく知られた
繩文早・前・中・後晩期より

弥生時代・須恵時代にかけての
遺跡であり、特に縄文後期土器の出土が多い。(2) また本遺跡の東北300mの方角東よりは弥生式
時代の住居址が発見され佐藤鉄信・木下平八郎らによって調査された。また前述の元山白山社は北
に1535mの風越山の頂上を仰ぐ位置にあり、古社と考えられ、その社前あたりは早く開けた古水田
地帯であると考えられる。(3) また鎌倉時代の東山道はこのあたりを通過したとし推測せられる。

1. 筒井 泰藏 飯田台地の水利、伊那 1968-5月

2 長野教育委員会 新産都市等開発地地盤文化財緊急分室調査報告書

昭和41年度

3. 1に同じ



飯田市さつみ遺跡

長野県飯田市上飯田 902~908番地

飯田市古屋坂外遺跡

長野県飯田市上飯田 6585番地

調査期間 昭和45年3月1日~3月31日

発掘調査委託者 日本道路公团名古屋支社

発掘調査受託者 長野県中央交通遺跡調査会

発掘担当者 大沢 和夫

さつみ・古屋坂外遺跡調査団名簿

団長 大沢 和夫 日本考古学协会会员

監修 佐藤 鉄信

〃 速郷藤森昌 長野県考古学会員

〃 木下平八郎

〃 土屋 長久

調査員 今村 醍興 日本考古学协会会员

〃 宮沢 信之

〃 伴 信夫 長野県考古学会員

2. 古墳以外遺跡

古墳以外遺跡は飯田市上飯田6585番地、通称丸山4区にあり、海拔540 m。2° ~ 3° の傾斜をもつ押川川（たるの沢ともいいう）の扇状地の端に立地している。遺跡のすぐ西に山の田井が流れでいて田底ととの高さ4 mである。風越山の峰虚空藏山（1113 m）をすぐ西北に仰ぐ地で川岸の小台地ともいいくべき地である。

山の田井とは筆者が仮つけた名称で、土地の人に聞てもはっきりした川の名も聞くことができなかつたなど地形的にはれば押川川の扇状地とその西の沢の扇状地の中間の標高の盆地で、両方の扇状地上を流れる小瀧（いずれも灌漑用水となっている）の落ち水が集って流下しているという用で、本遺跡のすぐ下で瀧の沢川に合流している。筒井氏によれば丸山地蔵は最も早く水田化された地域である。(1)

本遺跡の対岸山の田井を距てた小字地蔵より弥生式土器・土器器・須恵器が発見されており(2)また本遺跡の東方300 mの三つ見堂より筆者は弥生式土器を発見している。(3)けだし虚空藏山麓に発達した扇状地末端の水流を利用して早くから農耕がはじまっていたことを物語っている。

本遺跡の北方に城山があり、近くに宿の地名を残しており、伝承ではあるが飯田郡開発の主兵藤六郎の居宅跡というのも近い点よりみて中世的なおいの強い地帯でもある。

1. 筒井 勝彦 飯田台地の水利

伊那 1967~12月号

2. 長野県教育委員会 中央道建設地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書

昭和42年度

3. 長野県教育委員会 新産都市等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書

昭和41年度

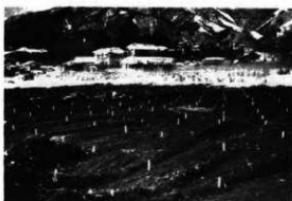
II 調査経過

1. さつみ遺跡

中央道遺跡発掘調査が長野県で最初に行なわれるよになったが飯田市上飯田さつみ、古里坂外の2遺跡である。3月3日、本調査のために長野県中央道遺跡調査会が組織され、調査団が結成された。

3月4日に準備にかかり、5日には前夜からの25cmの積雪と遺跡を埋めていた枯草を除去するためブルートーバーによって2遺跡の表土を排除する。

3月6日 さつみ遺跡に2m×2mのグリットを設定する。道路公団との調査契約によると、さつみ遺跡はレンチ工法による部分発掘で面積約1400m²の中5分の1の調査にとどまることになっており遺構を確認し、この調査結果によって再契約をするという変則的な調査である。



グリット杭打ちを終えたさつみ遺跡(写真1)

グリット設定は路線を横切る道路の南側をI調査区とし、a ~ k列、l ~ 27列のグリットで、道路の北東側をII調査区としたa ~ k列、l ~ 8グリットを設定した。

3月7日、さつみ遺跡において神事による供入式を行ない、いよいよI調査区より発掘調査にとりかかった。

1. I調査区

I区の調査は12日までの6日間を要した。

さつみ遺跡の地層は少なくとも2~3回の風

越山山麓の山崩れによる砂をかぶり、各グリ

ットにより層位を異にしている。砂の堆積も2m離れたグリットで全く違った様相を示しており、砂の堆積層が1層だけのところ、2~3層のところがあり、遺構は砂層を切って黒土層のおちこみをもつもの、砂層の下に遺構をもつものがあり、その遺物は時代的に同じとみられるという状態で調査をして完了した。

調査はグリットの第1列より、3列、5列……順に一つとびに掘りすめたが、地層の複雑さのためにいまは遺構を掘りこみ、その一部を破壊する不手ぎわを犯すこともあった。k 3に1号住居址、b 3・d 3に2号住居址をようやくにして確認したのである。

地層についてははっきりしてはいるが、つい遺構の検出も正確になり、a 9・c 9に4号住居址を検出し、a 9に近世火葬墓を、a 5に円形土壙を発見し、つづつに遺構を検出した。

調査をa、bの縦列から1、2の横列にも拡めると同時にa列の北西面に墳墓群の存在が予想され、m、n、o、列グリットを設定調査する。この増設グリット1~15列には宋銭を作う火葬墓が発見され、中世火葬墓群、近世火葬墓群Ⅰの存在が確かめられた。

g 19・i 19に住居址5号が検出され、i 1列21~25には居構とともに溝が検出され、これは、II調査区でI列に連がることがわかった。また23~25列には宋銭をもつ火葬墓や土塙が検出され、ここに墳墓群Ⅱの存在が確かめられた。I調査区発掘調査グリット数52である。

II調査区

3月12日より調査にかかり15日までさつみ跡を完了させる。34グリットについて調査を行なうが遺構の關係で1部は部分発掘で終るものもあった。縱はa、c、e……例、横は奇数列と一つとびに調査することにした。

はじめのa~e列を掘り、a 1、c 1に立石及び古鏡を伴う火葬墓を検出し、4~5列に住居址を発見し、住居址のプランを見るため全面発掘をし、6号住居址（土師）とする。ついでe~g列を調査各グリットに土塙、火葬墓をもつ e 7に7号住居址の1端を検出 d 8・f 8とf 9、e 9の上部を掘り住居址プランをさぐった。e 5、g 1には砂層下部145cmの黒土層に炭を含み調査する。e 5には土塙をもつが遺物ではなく、遺構もみられなかった。

I列にはI調査区から続く溝があり、さらに東に向う溝をk 3で発見する。2列を最後に調査し宋銭2個と火葬墓2を検出した。発掘グリット35、この調査区で検出された火葬墓、土塙が19基、住居址2個、この全区域に遺構が存在するものとみられた。



銀入れ式(写真2)

2. 古屋垣外遺跡

3月17日午前中さつみ道跡より器物発掘、発掘準備をなし、グリットの設定をする。2m×2mのグリットを縦にa～f列、横に1～20列を設け、a列に平行して2m×20mのトレンチを西側に設定する。

公団との契約によると44m²になっていたが実際面積は520m²あり、このため遺構の存在をたしかめて調査をすめることにした。午後より調査にとりかかるが、地層はさつみ道跡と同様で氾濫地盤の砂層があり混り、調査に苦労する。a 1, 3とa 5に住居址壁面と床面を検出し、拡張して掘りあける。弥生後期住居址1・2号とする。2号住居址の上部にa、bの境に列石があり近世の新しい陶器片を伴出するのが遺構とみるより、燧の石を集めて埋めたものとみられるものと考えられた。これと同じ線上にa 9・b 10に列石があり陶器片を伴出する同じ性格のものとみられた。

d 3～d 7に列石があり、前記と同じもの

とみて調査したが、これは径60cm位の円形の挙大の石を積み上げた独立したものとなり。さらに調査をすめ、火葬墓群であることを確認した。C 3には2つの土塚を、C 5には石を並べる形態の火葬墓1を検出した。11列以降には僅かな遺物を見たが遺構は検出されなかった。15・16列に深い黒土のおちこみがあり、調査をすめたが新しい果樹園の消毒パイプの埋めこみの溝であった。トレンチ-8には土塚を検出し、-9、-10に住居址の壁面と床面を検出し、拡張して調査し、弥生後期住居址の全貌を見ることができた。トレンチ-1～-7には砂の疊積で、遺構も遺物も発見できなかった。

3月19日には、道路公团名古屋支社の鈴木調査役、県教委林指導主事が遺跡発掘状況を視察した。
3月21日遺構の清掃、写真、実測をなし、現場における調査を完了した。調査面積は、72m²、18グリットで住居址3、中世火葬墓14基と土塚1を検出し、全面発掘の成果を上げえた。

調査期間中を通じ3月にしては異状な天候で連日最高中の寒さと吹雪、強風になませられながら調査を続行したもので16日の雨に1日現場作業を休んだのみの苦難の調査であった。

現場調査終了後、休日なしに遺物整理、製図、報告書の作成にとりかかる。



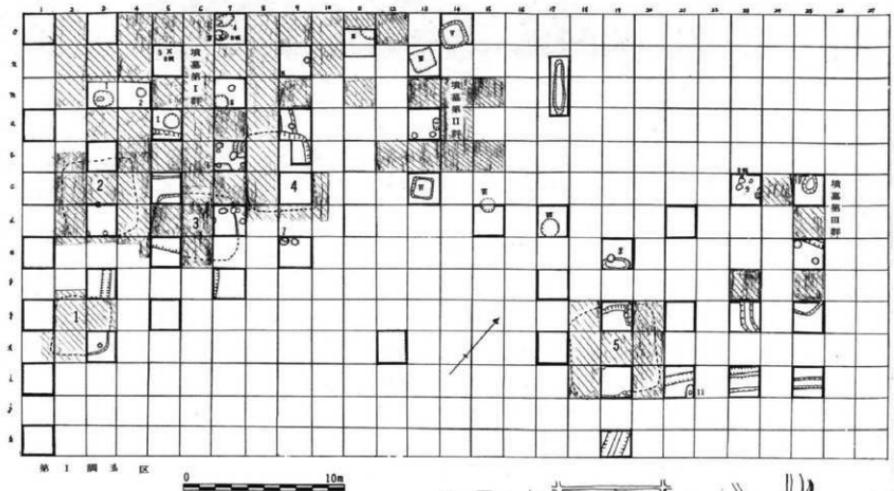
古屋垣外の発掘風景



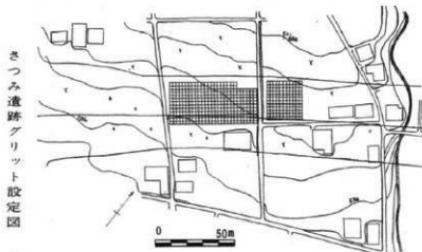
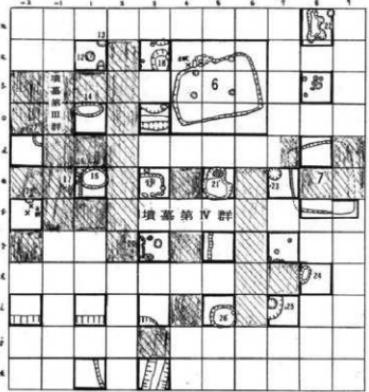
古屋垣外の遺構



日本道路公团鈴木調査役の視察



さつみ遺跡遺構図
(図 2)



さつみ遺跡遺構

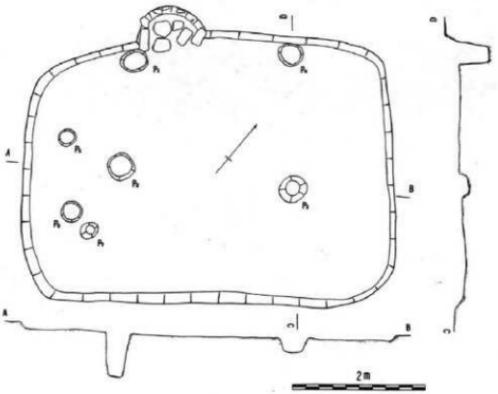
III さつみ遺跡の遺構及び遺物

I 住居址

- (1) I号住居址 h 3 グリットの深さ112mmに壁面とが8mmおちこむ床面と柱穴1個を検出したもので、遺物は打石器と弥生式土器片を床面で見見している。I1-h2・e1-2につながるとみられ調査を要する。規模からみて中島式の住居址と考えられる。この住居址につながるものとみられるV字構(巾60mm、深さ20mm)がF3にあり、この間連を調査するためg4・h4・5の調査が必要である。
- (2) II号住居址 b 3・d 3に発見されたもので、この遺跡の最初の調査のため見分けがつかず人夫が床面を切りこんだ後に発見したものであり、深さ65mmに床面がありd・e 3グリットの境に壁をもつものとされる。b・c・dの3列b・c・dの4列、e列の2,3,4につながるとみられ調査を要す。遺物は須恵器片と縄文後期片をみており、形態からみて平安末の住居址と考えられる。
- (3) III号住居址 C 5に東に向くおちこみとe 5の北西に向くおちこみがあり、(これは人夫によりII号住居址と同じに切りこまれた後発見した) d 7に南西に向くおちこみがあり、壁面、床面、柱穴が検出され住居址を確認したものの、遺物は良質な青磁陶片、灰釉陶器片、鉄鋤の出土をみており、平安期の特徴な住居址とも予想されるd 3・e 6・e 7・e 4・e 6・e 7の調査が必要である。
- (4) IV号住居址 a 9・b 9に壁面と床面を検出し、C 9に深さ90mmの床面を検出している。遺物は弥生式とみられる土器片、鉄片と鉄鋤の出土をみている。形態からみて弥生後期のものとみられるが遺物が少なく確認できない。住居址は完全に残り、b 7の北東隅に壁面がわずかにみられている。
- a 7・a 8・b 8・b 10・c 7・c 8・c 10・d 9・d 10を調査し住居址を完全に調査する必要がある。a 9グリットのIV号住居址の北西には壁上に浅いおちこみをもち柱穴もみられ、縄文後期土器片、磨石の出土をみ。縄文後期の住居址を切ってIV号住居址が構築されたとも考えられ、n 9には織文後期土器の4分の1個体が検出されており、a 6・a 7・a 8・m 8・m 9・n 7・n 8の調査も必要である。
- 以上4住居址は地層上の見分も困難なものであるが、その性格も複雑であり、これを完明することの意義は重要である。
- (5) V号住居址 g 19・i 19に発見されたもので、g 19にはカマド(写6)とみられる石組をもち、i 19の北東隅にも石組をもち遺物は須恵器片、灰釉陶器片が検出されており、平安期の住居址とみられる。g 18・g 19・g 20・i 18・i 20の調査の必要がある。
- (6) VI号住居址(図3) II調査区のa・b・cの4・5・6列に位置し、全面を発掘したものである。東西3.5m、南北5.5mの長方形隅丸の住居址で北壁にカマドをもつ主柱穴4個と支柱穴3個をもち主柱穴は北壁わざにP1-P4の2側地の2個p 2-p 3は住居址のはば中央よりに西



きつみ5号住居址かまど(写6)



さつみ 6号住居跡（図3）

東壁より1m～1.5mの距離にある
窓跡的なものである。

遺物は国分期とみられる土器類で、
平安末の住居跡とみられる。須恵器
灰釉陶器の出土はなく、遺物は極めて
少なく、おそらく移転した後の住
居跡と考えられる。木柱を切る土塗
がみられるが、今後の調査にまちた
い。特にカマドの南側より瓶型元宝
が検出され、火葬墓の存在が予想さ
れる。

(7) 6号住居跡 II調査区 d・e 7

f 8に発見された住居跡で、f 9の上層部の上をねはん縁を確かめたもので、およそ東西4.5m、
南北4mの大きさとみられる。遺物は山茶わん片を壁上で検出したのみであるが、平安末の住居跡
と考えられるd 7・d 9・e 8・e 9・f 7・f 9の調査を必要とするものである。

2. 土塗及び火葬墓

土塗には横円形の径120cm～180cm×70cm～140cmで15cm～30cmの深い掘りこみをもつ織文後期か
弥生後期とみられるものと、径90cm～110cmの円形または一边が130cm～140cmの方形の深い穴を掘
りこんだ近世土葬墓とも考えられるものがある。この二つの性格は構築方法において全く異なる様相
を示すものであるが、いずれも時代を決定づける遺物がみられない。後者においては近世土葬墓の場

合、今までの例によると、人骨は形をなしておらず、寛永通宝の六文銭やキセルを伴出しているが
何も遺物をみないことはその性格を突き明確すべき問題点であり、再発掘する必要がある。

火葬墓とみるものは径40m～60mの大土塙をもち、①土塙のみのもの、②土塙のまわりに石をつ
める、③中に石を置く、またはたてて、④石を並べるの4形態がみられる。土塙内に中世陶片をお
くものや古錢が入れられたものがあり度が中に入れられているか火葬骨片、骨灰は検出されていな
い。しかし形態からみて明らかに中世火葬墓である。

これらの土塙、火葬墓が立在するものでなく、一つの群をなして存在するものとみられる。b、
a、m、n、o列の2～10列にある1群＝墳墓第I群、o～eの11～19列に存在する土葬墓を主体
とする1群＝墳墓第II群、a～fの22列より第II調査区4列に連なるとみられる中世火葬墓を主体
とした1群＝墳墓第III群、第II調査区の全域にみられる土塙を主とした墳墓第IV群を上げることが
できる。

(1) 墳墓第I群

2、3、4号は火葬墓とみるもので土塙のみのものであるが2号より美しい緑色をなした青
磁系の陶器類が底部にはいっており、3号よりは古銭一触触して字の不明なものが入っていた。
n 5の4号は土塙がはっきりしなかつたが大觀通宝1個が検出され、05につながるみられる。

03よりは大形のオリジン一古瀬戸焼

片が出土し、この北西側に火葬墓の存在が予
想される。1号は上部に幾本の丸をもつ特殊
な土塙で遺物は織文後期土器片が検出されて
いる。6号土塙は1部分の発掘で今後の調査
を要する。I・II号墳は径90cmの堅った円形
で垂直に砂層を67cmと38cmの深さに掘りこん
だものであり、墳墓第II群にはいると考えられ
る。第I群は中世火葬墓を主体とするもので、この区域での遺物は品質の良き中世陶片と宋
銭であり、中世前半の火葬
墓とみられるもので、この
全域を調査し火葬墓群の性
格を明らかにすることは板
伊地方の中世解明のために
も重要なことである。

(2) 墳墓第II群

III号～VI号の土葬墓とみ
る方型の大きな土塙をもつ
IV・V・VI号は方形III・VI
は円形で50cm～70cmの深
さをもつV号の方形土塙は
砂層より80cmの深さをも
つ垂直に掘りこまれたもので



さつみ 2号火葬墓（写真8）



第 2 群 N 号（写真9）

方形の稜柱を埋めたとは考えられないもので底部も浅い舟底状を呈す。円形の土器団号は直径110cm砂層に75cm垂直に掘りこむもので稜柱を埋めたと考えられるものであるが、ともに遺物がなく、土器穴との推定の範囲に出ない。

Ⅲ・Ⅵ号は一部を調査したのみであり、またm、n 17列にみられた上部に列石をもち下部は長さ3.5m、巾70cmの細長い土塊状をなすものについては、礫石、中世陶片、縄文後期土器の出土をみており、おそらく煙の壺に捨てられたものと推定される性格はわからない。以上のよう観点から未調査在リットの発掘が望まれる。

(3) 塔基第Ⅲ群

第I調査区の北東側から第II調査区の南西側につながる火葬墓を主体にしたもので、7基の火葬墓と10、11号土坑が第I調査区に見出されている。9号より皇宋元宝、28号より咸平元宝と天聖元宝が、また6号住居跡のカマド北西側（おちこみがみられる）により絹胎元宝が検出されており、16号より良質の中世陶器片が底部に入れていた。12号（写真10）には土埴の中心に扁平の石を石碑状に立ててあり、火葬墓形態の特殊なものとみられる。

のとみられた、この火葬墓群は第I群と時代的には同じとみられるが形態上に立石をもつ、石を並べる、周囲を石でつめる、土埴のみのものの4分類をもつ多样性のもので火葬墓周辺の未調査在リットの発掘は重要な火葬墓研究の課題をもつものである。

(4) 塔基第Ⅳ群

第II調査区の調査在リットの大部分に見出されており、10基の土坑が検出されている。そのうちにも完全に調査されたものは5基で他は1部分を現わさず大きい。21号は砂層下の深さ145cmに炭を多く含む黒土層があり、砂層を30mm掘りこんだ土塙であり、遺物は何もなく時代は決しかねるが、特殊な形態をもつものである。14号よりは古鉄（字磨滅）を作出している。

土埴形態には整った舟形のもの、方形に近いものもあり、出土遺物は古鉄、中世陶片を出すもの、縄文後期土器片をもつものがあり、土埴形態と時間的な差を究明する課題が残されており、調査未了の土坑を調査する必要がある。

3. 溝

第I調査区F 3に東西に向かう800mの市の溝があり、I 25、I 23（I 21はみられない） 第II調査区K 1～2、I 1に連がりI 3で終る巾60cmの溝と、これに隣りあうようにK 3に巾150cm、深さ150cmのV溝がある。また第I調査区G 23に東西に向かうカーブするV字溝、I 21、I 23では大V溝に平行する小溝が検出されている。これらの溝は部分的にみられるもので、水路としては考えられな

いもので溝の性格をもつものと思われる。溝についても住居跡との関連において究明したい。

4. 遺物

遺跡全面にわたり表層より縄文後期土器片、黒旺石片が採集されており、後期の遺跡と考えていたが、これからの中土器片の多くは磨滅しており、上段にある湯底遺跡よりの流れ込みとみられる。

表層下中に出土した遺物は多くは中世陶片で繩器類が多い。（写真12）中には良質な灰陶による淡緑色の蓋、茶わんの類もみられる。これらの中にもじって青磁陶片、灰陶陶片があり、時代的に平安末にさかのばる遺跡の存在を示すものである。

縄文後期の遺物として注目されるものに、C 9出土の4分の1個体分（写真13）がある。口部等は平で、口縁の下に四方に頂点をもつゆるい山形状に突起をもち、これに深い圧痕をめぐらすのみでは無文の深杯である。

この期の石器として分網形石斧片（写真14の8）がI 25より出土している。

弥生式土器ではI号住居址、IV号住居址より出土した土器片が弥生後期のものとみられ、I号址出土打石器（写真14の2）は土器の多い弥生式石器とみられる。打石器類は8個と少ないが、I 23出土の大形の鉤形打石器があり（写真14の8）弥生式石器の典型的なものである。

写14の3はO 1出土の弥生式の有肩型石器の2分の1を欠くものである。

IV号住居址出土の土器片は量的に少ないが、国分期のものとみられる。灰陶陶片も僅かにみられており、V号住居址より須恵器片が検出されている。

土器、石器類は極めて少なく、器形をみられるものは縄文後期の土器片のみである。陶器片は多く、器形のわかるものが多い。



さつみ遺跡遺物1 (写真12)



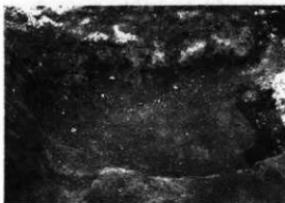
さつみ遺跡遺物2 (写真13)



さつみ遺跡遺物3 出土石器 (写真14)



第3群 12号 (写真10)



第4群 14号 (写真11)

写真15の1はa 9出土の磨石とみられるもの、2はm17、3はc 5出土で不明の石器である。
古鉄は7枚検出されており次のようである。(写真17)

鑄造年代	出 土 地 点
成平元宝 998年	II f - 2 28号火葬墓の周辺
天聖元宝 1023年	"
皇宋元宝 1039年	C23 9号火葬墓
祐聖元宝 1094年	II a 4 火葬墓とみられるが未調査
大觀通宝 1107年	n 5 5号火葬墓 o 7 3号火葬墓
不明(廢減) " "	II C11 14号土塙上部

出土土器片、石器をまとめると下記のようである。

繩文式後期土器片100 晩期土器片1
併用式(後期)10
土師器片20・須恵器片2
灰陶器片10・青磁陶片4
中世陶器片100 内耳土器片20
山茶わん片4
近世陶器片20

石器・打石斧10、磨石1、砥石3、不明石器2

5. さつみ道跡の考察

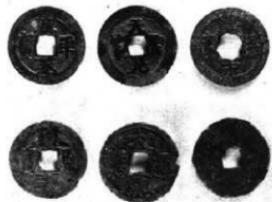
さつみ道跡の発掘調査は部分調査により、
住居址は一部を調査したのみにすぎないもの
で7住居址中、6号址のみがグラ
ンを知ることができたものである。

このため再調査により、その全貌を
把握すべきで、このため少なくとも
30グリットの調査が必要とする。

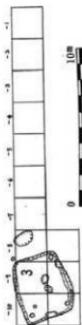
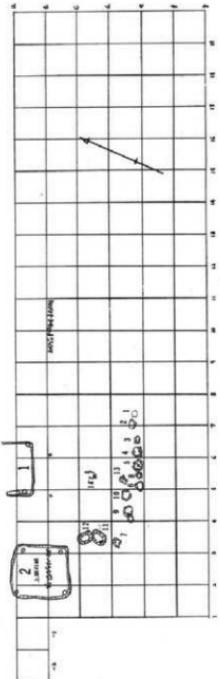
土塙、火葬墓についても同様なこ
とがいえるもので、特に土塙の性格、
火葬墓と土塙穴の時間的な変遷、分
布の状態を知るために67グリットの
発掘調査を要するもので、第I群25
グリット、第II群では7、第III群で
は21、第IV群では14のグリットは
調査することが課題である。



さつみ・遺物4(写真15)



さつみ・遺物5(写真16)



古屋垣外遺跡・グリット設定図(図4)

IV 古屋垣外遺跡遺構及び遺物

1. 住居址

(1) 1号住居址(図5) a. 5グリットを中心に発見されたもので、北半分は道路予定線をはずれ調査不能となった。

南東隅壁上はナシの種穴のために破壊され、

遺物はb. 6グリットに混って出土をみた。住居址のプランは東西3.5mの隅田方形のもので砂層に20cm~30cm

掘りこむ堅穴住居址である。柱穴は南北隅の壁について1個、南壁より40cm離れた西壁に

1個があり、4個の主柱穴をもつ住居址とみられ、壁に密着した所

に柱穴をもつことは無い住居址を最も根に利用するための構造方法として注目される。

西柱穴に残りあって壁に密着する120cm×40cmの細長い貯藏穴があり、深さ10cm~15cmのものである。

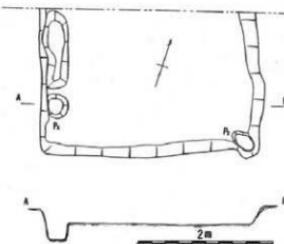
遺物は座光寺原式の鉢形土器片と中島式盤形土器の頸部片に欠山式のカメ形片

があり、打製石砲1丁を検出しているが遺物は少ない。座光寺原式を伴出しているが、1号址の時期は弥生終末のものと考えるべきものである。

遺物は座光寺原式の鉢形土器片と中島式盤形土器の頸部片に欠山式のカメ形片

があり、打製石砲1丁を検出しているが遺物は少ない。座光寺原式を伴出しているが、1号址の時期は弥生終末のものと考えるべきものである。

(2) 2号住居址(図6) a. 3. b. 3に中心をおくもので地表より黒土層の70~80cm下に氾濫堆積の砂層があり、この砂層にシルト状の土で壁がかためられたものを検出した。これに沿って掘りすめて発見した住居址である。砂層の下に厚さ5cmほどの黒土層があり、この下に床面がある。プランは、東西3.8m、南北3.4mの隅田方形で壁高20cmの堅穴住居址である。主柱穴4個で南東隅の壁について斜めに南西に向く支柱穴1個がある。炉址は住居址の北側3分の1の中央部に深さ5cmの浅い掘りこみをもつ50cm×40cmの楕円形のものであった。遺物は僅かな中島式や欠山式の土器片を検出したのみであるが、弥生終末の住居址と決定づけたものである。



古屋垣外 1号住居址 (図5)



古屋垣外 1号住居址 (写真17)

(3) 3号住居址 (図7)

トレチの最西端にあり

黒土層を15cm掘りこんだ堅

穴住居址でプランは東西4

m、南北3.7mの隅田方形、主

柱穴は4個、北東の柱穴は

壁上にあり、南西の柱穴は

支柱穴をもっている。南壁

側には長さ2m、巾20~30

cm、深さ7cmの周溝をもつ。

炉址は中央より南によっ

て50cm×37cmの楕円形の深さ

15cmの凹をもつ。炉内は

多くの灰灰があり、この中

から欠山式のカメの口縁部

片が出土している。炉址の

東側には75cm×50cmの楕円形の深さ10cmの凹があるが、炉

址であつたものが使用され

ずにあつたものか、または

容器を置くためのものとも

考えられるものであった。

貯藏穴は南東隅に深さ16

cm、65cm×48cmの楕円形の

ものと西壁の中央部に75cm

×35cm、深さ22cmの楕円形の

もののが二箇ある。遺物は

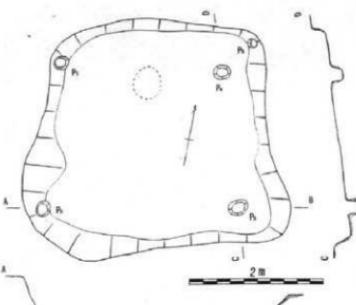
少なく中島式の蓋形、カメ

形の土器片に欠山式土器片

を伴出している。弥生終末の住居址である。

土坑、住居址の北110mに125m×90mの深さ20mの土坑がある。高森町夜平道跡における例にもこれと同じ形態のものが4住居址にみられている。しかしこの性質については把握するる段階にいたっていない。

3住居址とも規模は小さく、遺物も極めて少ない。弥生終末期住居址発掘調査例では、坂田市麻科安宅遺跡、高森町夜平道跡があるが、住居址の規模は小さく、遺物も安宅道跡C-1号址を除き少ないことが特徴である。今次調査によって特に山麓、または山麓に近い道跡においては傾者であることがはっきりした。このことは弥生終末期における飯伊地方の調査点として今後充実すべき課題といえよう。

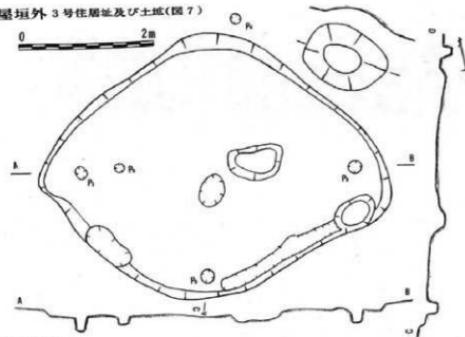


古屋垣外 2号住居址 (図6)



古屋垣外 2号住居址 (写真18)

古墳垣外 3号住居址及び土堆(図7)



2. 墓基群遺構(図8)

墳墓群遺構はc. 2、c. 5、d. 3～d. 7の各グリットより発見されたものである。

それらはきわめて狭い範囲内に集中して存在していた。

またいずれの墳墓も黒色土層最下部より土堆状をなすものと、拝大の自然角礫を

複数と配置する配石状態を示すものの二種がある。1

号より8号及び10号墳墓は、発見当初より円形を有する配石状態を示すものであつたが、特に4号、5号、8号付近においてはその配石

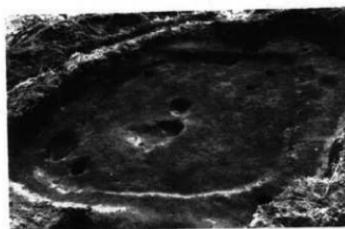
状態はきわめて雑然としたものであった。これらの墳

墓群は、はば南西より北東に直線的に存在しており、

その大きさも長径50m、短径40～30mを算するもので

あり、深さも20m前後と同様な規模を示すもので

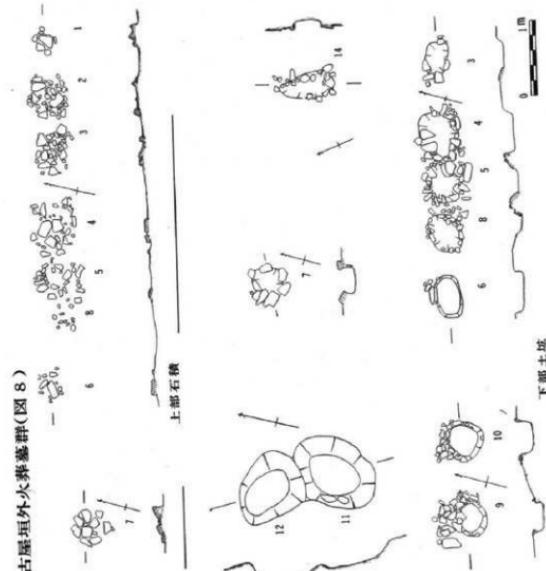
ある。



古墳垣外 3号住居址(写真19)



火葬墓群 上部石組(写真20)



古墳垣外火葬墓群(図8)

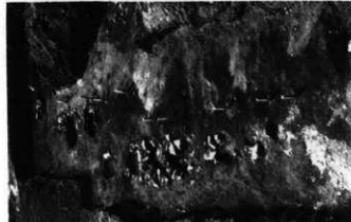
1号墓は、褐色砂層上面

に自然石8個をもって円形に配されていたものである。
きわめて小形なものである。
また配石下部には振り込みもなく、自然石を配置したのみであった。2号墳墓も1号墳墓同様褐色砂層上面に構築されたものである。

3号墳墓より4~8号、
10号の各墳墓は、褐色砂層をわずかに振り込みの周辺部に自然石を配置するもの

の二種がある存在する。かかる墳墓はいずれも内部底面より10cmほどまでは暗黒色の土が存在し、それより上部は墳墓振り込み周辺までを擎大的の石で内部をぎっしりつめその上部にやや大きな石数個をもって蓋状に置いてある。
さらにその上部を擎大的石でマウンド状に若干積み上げて墳墓を構築したものと考えられる。その中にあって9号、10号墳墓は発見当初より、特に北側に多くの自然石を配置し円形の振り込みが認められるものであったが、北側のみ底面近くまで壁面に擎大的石を振込むものであった。またこれらの墳墓群に対し11号12号墳墓は黒色土層最下部より白色砂層まで振込む土塊状をなし、自然石などをもって構築したものではない。ただ11号墳墓のみ底面近くの壁面に2個の自然石が振込まれており、その周辺より中世陶器が出土している。この2つの墳墓は相接しているものであり、11号は12号墳墓によって切られたものである。

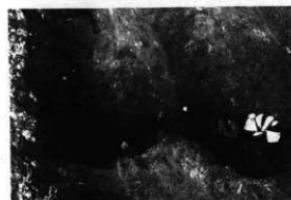
これらの墳墓群の中で、自然石を用いて構築したものは、その形態、構築方法などにより飯田市山本竹佐において調査された大塚古墳墓群と同種のものである。また出土遺物の中に中世陶器類や瓦などから認められる事実から、中世における火葬墳墓の形式と考えられるものである。またこの種の遺構は、中野市安源寺遺跡においても調査されているものであり、中世における墳墓構築状態を明瞭に示すものである。またこれら墳墓群の有する性格からも中世仏教思想の一端を知る手がかりにもなる。



古墳 墓外 大塚 墓群 (写真21)



大塚 墓 9号・10号 (写真22)



火葬 墓 11号・12号

本調査における墳墓群は、きわめてかぎられた範囲内に集中している点、この墳墓は中世における一家族の墓群として考えられないのである。なお11号・12号墳墓はたがいに接合関係にあるが、時期的には同じであり11号と12号墳墓の間には、わずかな時間的差が存在するものと思われる。

13号は最後に発見されたもので、ともに土埴輪を石で囲むものであり、14号は浅い土坑を振り石を並べたものである。

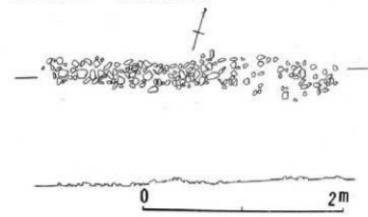
出土遺物は中世陶器類が墳墓群周辺より比較的多く認められている。5号土坑底より天目茶わん片、7号土坑底部には古瀬戸焼茶わん片、11号の中からはカメの大破片が4片重なって出土している。その他の陶器類は発見されなかった。なお墳墓群形態をみると、

①円形に石を構成してね土塙をもたないもの。②埴輪を石で囲むもの。③石を並べるもの。④土塙のみのものの4形態に分類される。なおグリットb9及びb10にかけて直線的に自然角礫を配した長さ3m巾30cmほどの配石直線が発見されたが、これは黒土中に存在するものであり、その配石状態もきわめて雄健としたものである。また2号住居址上部の黒土中にもこれと近似したものが存在し、これを延長すると直線的につづく可能性がある。またその周辺部及び配石内部からは、近世陶



火葬 墓 14号 (写真24)

古墳 墓外 b9・b10石組(図9)



器類にまじり中世陶器類の他生式土器（高杯脚部）などが併出している関係上これは後世のものと考えられる。

以上火葬墓について説明してきたが、その形態などより中世火葬墓群として考えられるものであり、大塚火葬墓群、安堵寺火葬墓群などの例からも中世における火葬墓の一例として注目されるものである。

3. 遺物

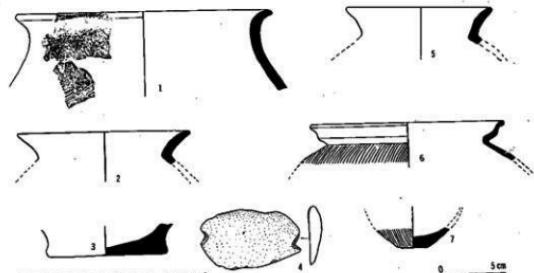
(1) 住居址出土遺物 (図10・11)

1号住居址 (1～4、8～10) 1は變形土器で、口縁部はゆるいカーブで外反し、胴部は張るものとみられる。頸部に流紋文を、胴部にかけて平行斜走短線文が施されており、座光寺原式の特徴をもつものである。2は變形土器の口縁部で朝顔花形の開いた口縁をもち、胴部は球状になる安堵遺跡C区・1号址出土の欠山式の大形壺と同形になるとと思われるものである。3は底部で底からの立上がりが一旦は内側へもどり外反して胴部へ続く中島式(10)にみられるものである。8は底面に接する部分、9は胴部片でともに柳状器具による細い条痕が施された欠山式變形土器にみられるものである。10は4分の1の同心円印文で、中島式変形土器にみられるものである。無文の口縁部の小破片が一片ある。この口縁部には浅い刻み文がさかず残っているものである。器形様式は不明である。この他、ヘア削り調整盤をもつ中島式にみられる土器片数点がみられる。

石器は4打製石磨丁1個のみである。背面に自然面をもつ粗雑な作りで、重量45g、刃部角30°、硬砂岩製のものである。

2号住居址 (5～11) 5は2と同様の欠山式變形土器にみられる口縁部である。11は中島式の裏にみられる平行短線文を施した胴肩部である。

3号住居址 (6～7、12～15) 6は住居址の中から検出されたもので、S字口縁をもち器壁の極めて薄い良質な胎土で焼成は堅い。柳状工具による細い条痕が胴部に斜に施されている。



古屋塙外出土遺物 I (図10)

いる。胴部はおそらく球状になるものとみられる。7は底面の底部で細い条線が斜めに引かれている。12は變形土器の頸部で火葬文が施されたもので、座光寺原式にみられる横火葬文の下に波状火葬文が施されるものとみられる。13・14は中島式の變形にみられる波状火葬文が施されたものである。15は6の胴部とみられる。この他、無文ヘア削り削りの調整盤を残す變形の焼成の良い小破片数点が検出されている。

3住居址とともに出土遺物は極めて少なく、主となる土器は中島式と欠山式であるが、これに伴って座光寺原式の土器が出土しており、この点は今迄の鹿児島地方の住居終末期の住居址出土遺物とは異なるものである。また石器は石磨丁1個のみの胎土で、これも極めて特異な例といえる。

(2) 中世陶器片

火葬墓より出土したもの。

5号火葬墓よりは良質な天目茶碗が、7号火葬墓では美しい灰釉器の古瀬戸茶碗の胴部片が、11号火葬墓より同一器形の鉢の大形壺片7片が出土している。この鉢も美しい黄土色の灰釉である。火葬墓の石積みの中より天目茶碗片、壺の破片等約20点が検出されているがいずれも良質なものである。

吉屋塙外出土遺物 II (図11)

(3) その他

不明の剣石より近世陶片が多く出土しており、これにまじって中世ともみられる雜器類も検出されている。12号火葬墓より砥石1個が出土し、列石中より砥石3個が検出されている。

- | | | | |
|----------|-----------|-------------|-------|
| 注1. 今村善興 | 飯田市座光寺原遺跡 | 長野県考古学会誌第4号 | 1967年 |
| 2. 佐藤勝信 | 安堵遺跡C区 | 安堵・大島 | 1969年 |
| 3. 宮沢恒之 | 飯田市中島遺跡 | 長野県考古学会誌第4号 | 1967年 |

4. 考 察

今次調査区域は遺跡の南端部のごく限られた1部の発掘調査であったが全面発掘により他の住居址3の調査と中世火葬墓群の全貌を把握できた意義は大きい。

弥生住居址群が調査区の北側の果樹園に據ることが予想された。

弥生終末期における住居址が他の遺跡の発掘調査例と対比して滋伊地方におけるこの時、つかむ手がかりを得た。

中世火葬墓群についての構築方式について円形に石組をもつ例が明らかになった。また副葬品なく、良質な陶器片を埋葬に用いたことに対し、山本大塚火葬墓群との対比においては埋葬者の身分差を考えてみる手がかりとなつた。

お わ り に

長野県内の中央高速自動車道のコースが決定され一部ではいよいよ工事に入ることにならしく、このコースには埋蔵文化財が多く存在することは分布調査で明らかになつて、日本道路公団と長野県教育委員会の間にしばしば協議がもなれた。その結果、昭和45年銀坂田さつみ遺跡と古屋塙外遺跡については記録保存することになり、長野県中央道遺跡調査設立され、調査会が日本道路公団名古屋支社の依頼をうけて発掘調査を行なうことになつた。遺跡調査会は主として地方の考古学研究者を調査員に委嘱し3月4日より3月31日までに発掘調査を行なつた。

さつみ遺跡については部分発掘をなし、遺構の存在が明らかになった場合には再契約しするさまりであったので、今回の発掘では遺跡の全貌は明らかにされ得なかつたが、住居址中世の墳墓群4を見出した。

古屋塙外遺跡では全面発掘を行ない弥生後期の住居址3と中世火葬墓14基を発見し、下條田地方の中世墳墓の形態を明らかにし、それが古墳のそれと共通点をあることを明らかにすることは大きい収穫であった。

ただし、3月とはいゝえ真夏候の蒸暑と連日の吹風と強風の中で行なわれたが、発掘調査たって、遺跡調査会の協力と発掘調査員の努力と調査に加わった飯田高校考古クラブなどの奮斗により、期間内に発掘調査の完了したことはありがたいことであった。

現場調査から整理、報告書の作成にと、期日に限定があり、無理な仕事を強行したが、未成業と今後の見とおしをもつたことはよろこびになつた。

この報告書の執筆は大沢和夫、佐藤勝信、迷惑麻呂があつた。

さつみ・古屋塙外 中央道埋蔵・文化財発掘調査報告書

印刷 昭和45年3月30日

発行 昭和45年3月31日

発行者 日本道路公団名古屋支社

編集者 大沢和夫 佐藤勝信

印刷所 飯田市通り町1 秀文社